

## もっと広がる ●クスリの世界

### 带状疱疹の予防と治療

「子どもの頃にかかった水ぼうそうのウイルスが、体の中に一生住み続けている」。そう聞くと、少し不思議な気持ちになるかもしれません。带状疱疹は、水ぼうそう（水痘）にかかった後、神経の中に潜伏した「水痘带状疱疹ウイルス」が、加齢や疲労、ストレスなどで免疫力が低下した際に再び活性化することで発症します。成人のおよそ9割がこのウイルス

## ワクチン接種、早期受診を

を体内に保有しているとされ、誰にとっても決してひとごとではありません。

発症は70代で初めて経験する方が多いとされており、こうした背景から2025年度より、65歳の方などを対象に、带状疱疹ワクチンが予防接種法に基づく定期接種の対象となりました。これにより、生涯に1回、一部公費負担で接種が受けられます。

带状疱疹ワクチンには「生ワクチン」と「不活化ワクチン」の2種類があります。生ワクチンは1回の皮下注射で済む手軽さが特徴です。一方、不活化ワクチンは2カ月以上間隔を空けて2回接種する必要があります。接種から3年後の時点での予防効果は、生ワクチンで約6割、

不活化ワクチンで9割以上の方に認められています。不活化ワクチンの接種は、費用や接種回数の負担を考えると悩む方もいますが、10年以上にわたり高い予防効果が持続することが示されており、大きな利点といえます。

带状疱疹で特に厄介なのは、皮膚症状が治まった後も痛みが長く残る「带状疱疹後神経痛」です。しびれや痛みが続き、睡眠や日常生活に影響を及ぼすこともあります。この後遺症を防ぐためには、ワクチンによる予防のほか、発症時の早期治療が重要です。

皮膚が「何となく痛がゆい」「ピリピリする」。そんな違和感が、带状疱疹の始まりであることもあります。少し大げ

さに感じても、早めに医療機関を受診することが、後々の痛みを防ぐ第一歩になります。抗ウイルス薬は、できるだけ早く使い始めるほど効果が期待できることも覚えておくとよいでしょう。

私は患者さんからそのような訴えがあれば、带状疱疹の初期サインを見逃さないよう、お話を伺いながら、赤みや発疹の有無など皮膚の様子にも気を配るようにしています。違和感の段階で「もしかしたら」と気づき、一刻も早く医師に診てもらおうようサポートすることが、患者さんのその後の生活を守ることにつながるからです。

（杉山 弘樹・県病院薬剤師会学術部員）

<毎月第4火曜日に掲載>